

2024（令和6）年の漁況

森脇和也・山根広途・寺門弘悦・岡本 満

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に1960（昭和35）年以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示した。

2024（令和6）年の総漁獲量は約7万8千トンで、前年比99%、平年（2019（令和元）年～2023（令和5）年の5ヶ年平均、以下同様）比116%であった。また、CPUE（1統1航海当たり漁獲量）は60.5トンで、前年並みで平年を上回った。（前年比100%、平年比131%）。なお、2024年の漁労体数は10ヶ統（県西部2ヶ統、県東部8ヶ統）であった。

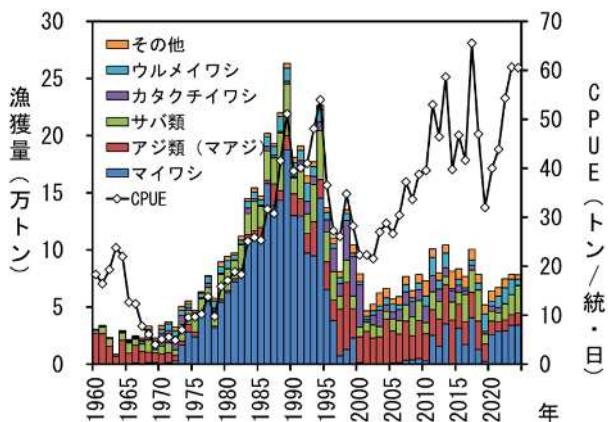


図1 島根県の中型まき網漁業による魚種別漁獲量とCPUEの推移（2002年までは農林水産統計値、2003年以降は島根県漁獲統計システムによる集計値）

本県の中型まき網漁業による漁獲物の主体は、1970年代後半～1990年代前半のマイワシから、1990年代後半にマアジに変遷し、2010（平成22）年までは同種が主要な魚種となっていた。ところが、2011（平成23）年にマイワシの漁獲割合が急増し、以後マイワシ、マアジ、サバ類の3種が主要な魚種となっている。今年度の総漁獲量に対する魚種別割合は、マイワシが44%、サバ類が30%、マアジが13%、ウルメイワシが7%、カタクチイワシが1%であった。

(2) 魚種別漁獲状況

図2～6に島根県の中型まき網漁業による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

① マアジ（図2）

2024年の漁獲量は約1万4百トンで、前年・平年並みであった（前年比113%、平年比95%）。

漁獲の主体は、1歳魚（2023（令和5）年生まれ）、2歳魚（2022（令和4）年生まれ）で、0歳魚（2024年生まれ）はあまり見られなかった。例年、山陰沖ではマアジは春から初夏にかけてまとまって漁獲されるが、2024年1月～7月では、2月と6月に約1千2百トンで平年並みとなったほかは、平年を下回る漁況であった（総漁獲量3千4百トン 前年比69%、平年比44%）。また、8月～12月の漁獲量は前年・平年を上回る漁況であった（総漁獲量7千トン 前年比165%、平年比216%）。

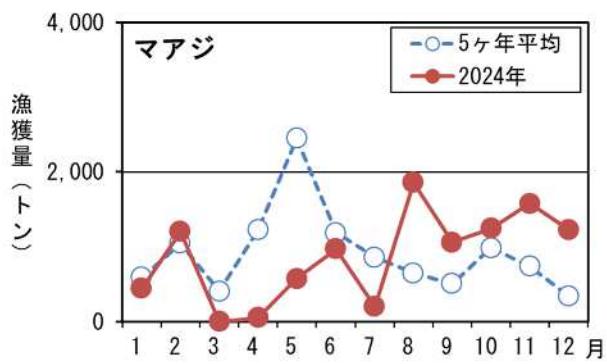


図2 中型まき網漁業によるマアジの月別漁獲動向

② サバ類（図3）

2024年の漁獲量は約2万3千トンで、前年・平年を上回った（前年比133%、平年比210%）。

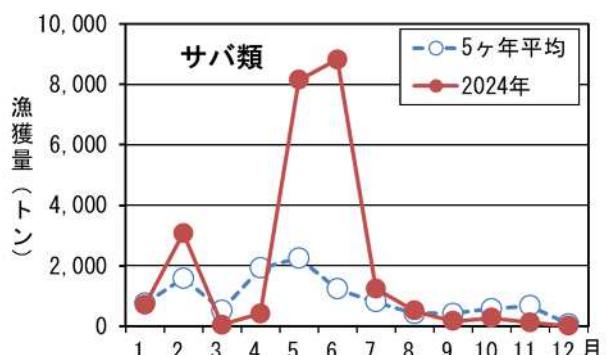


図3 中型まき網漁業によるサバ類の月別漁獲動向

漁獲の主体は1歳魚（2023年生まれ）で、夏季以降は0歳魚（2024年生まれ）も混じって漁獲された。平年の月別の漁獲動向は、2月、4月～7月にかけて漁獲がまとまる傾向にあり、2024年もほぼ同様であり、2月は3千トン、5月と6月は各月8千トン以上と平年を大きく上回った。

③マイワシ（図4）

2024年のマイワシの漁獲量は約3万5千トンで、前年並み、平年を上回った（前年比101%、平年比144%）。平年の月別の漁獲動向は、県東部を主漁場として3月～6月、9月～10月に漁獲がまとまる傾向にある。2024年は4月に1万3千トンと過去5年間で漁獲量が最も多かった。

対馬暖流系群のマイワシ資源は2000（平成12）年以降、低水準期が続いているが、2011年（本県の中型まき網漁獲量約2万5千トン）から漁獲量が急増した。2012（平成24）年以降、不漁年が散見されるが、約1万5千トン～4万トンの漁獲量が続いているおり、資源量は回復傾向にあると考えられている。

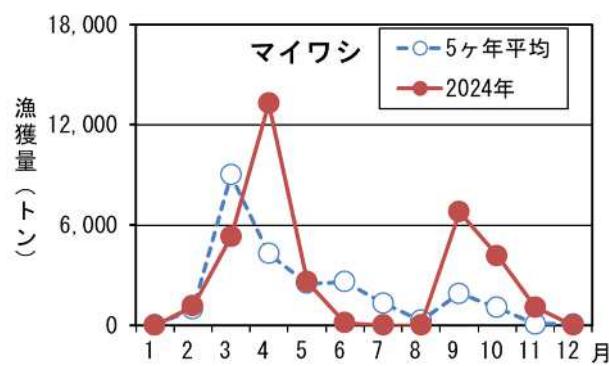


図4 中型まき網漁業によるマイワシの月別漁獲動向

④カタクチイワシ（図5）

2024年のカタクチイワシの漁獲量は542トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比412%、平年比5%）。2022年以降は千トンを大きく下回る不漁が続いているが、2024年も不漁の年であった。

⑤ウルメイワシ（図6）

2024年のウルメイワシの漁獲量は約5千4百トンで、前年、平年を下回った（前年比41%、平年比48%）。2021年から2023年までは毎年1万トンを超える漁獲が続いたが、今年はその半分の漁獲量となつた。

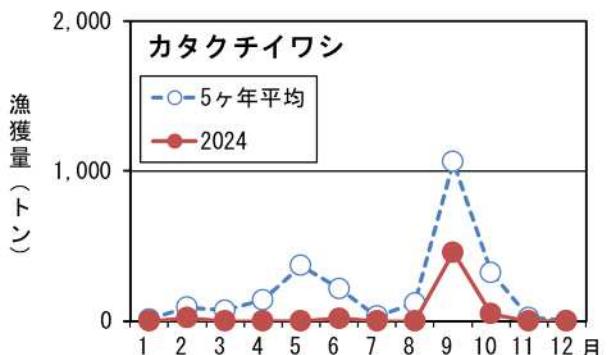


図5 中型まき網漁業によるカタクチイワシの月別漁獲動向

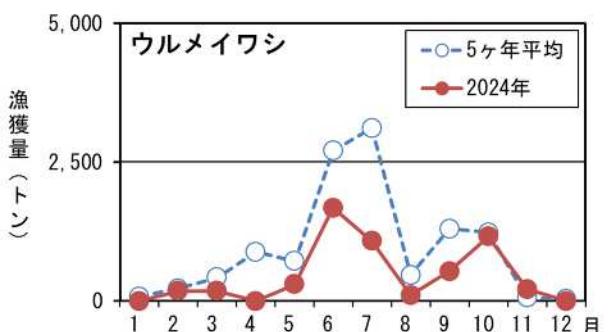


図6 中型まき網漁業によるウルメイワシの月別漁獲動向

2. いか釣漁業

浜田漁港に水揚げされる主要イカ類（スルメイカ、ケンサキイカ）の漁獲動向を取りまとめた。集計対象とした漁業種類は、いか釣漁業（5トン未満船）、小型いか釣漁業（5トン以上30トン未満船）および中型いか釣漁業（30トン以上）とした。なお、浜田漁港は県内外いか釣漁船が水揚げする代表的な漁港である。

①スルメイカ

2019（令和元）年以降における浜田漁港で水揚げされたスルメイカの水揚量の年推移を図7、水揚金額と単価の年推移を図8に示した。2024（令和6）年の水揚量は38トンであり、前年（67トン）ならびに平年（2019年～2023（令和5）年）の平均：62トン）を下回った（前年比57%、平年比62%）。2024年の水揚金額は約2,500万円（前年比60%、平年比73%）であった。平均単価は673円/kgであり、平年（548円/kg）の1.2倍であった。

次にスルメイカの月別水揚動向を図9に示した。2024年は9月を除いて、水揚げは低調であった。なお、本県では12月～3月にかけて冬季発生系群の産卵南下群、4月以降は秋季発生系群の索餌北上群が例年漁獲対象となっている。近年は両系群とも資

源水準が低位にある^{*}。

* (国研) 水産研究・教育機構 水産資源研究所 令和6年度のスルメイカの資源評価

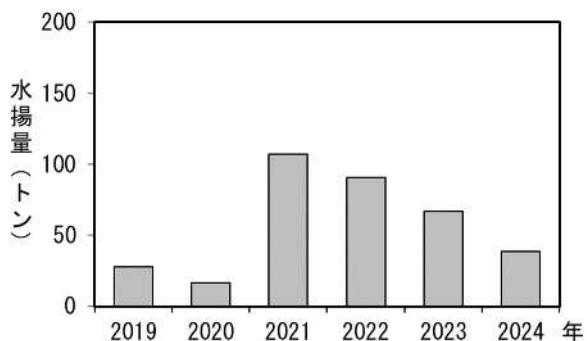


図 7 浜田漁港におけるスルメイカの水揚量の年推移

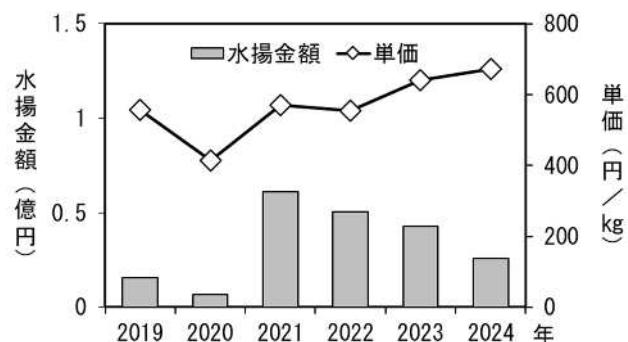


図 8 浜田漁港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の年推移

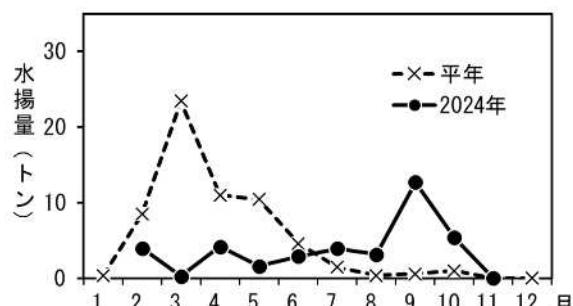


図 9 浜田漁港におけるスルメイカの月別水揚動向(平年は過去5年(2019年～2023年)の平均)

② ケンサキイカ

2019年以降に浜田漁港で水揚げされたケンサキイカの水揚量の年推移を図10、水揚金額と単価の年推移を図11に示した。2024年の水揚量は53トンであり、前年(45トン)および平年(39トン)を上回った(前年比118%、平年比136%)。水揚金額は約8,500万円(前年比124%、平年比145%)であった。平均単価は1,600円/kgであり、平年(1,528円/kg)の1.0倍であった。

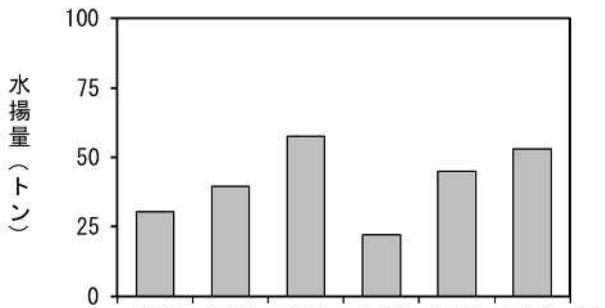


図 10 浜田漁港におけるケンサキイカの水揚量の年推移

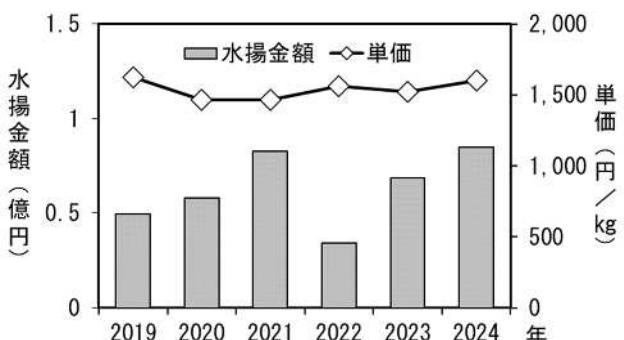


図 11 浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の年推移

次に、ケンサキイカの月別水揚動向を図12に示した。2024年は大型のケンサキイカ型が主体となる春夏来遊群(4月～8月)の水揚量は26トンであり、平年を下回った(平年比89%)。一方、小型のブドウイカ型が主体となる秋季来遊群(9月～12月)の水揚量は27トンであり、平年を上回った(平年比316%)。秋季来遊群は2019年から長らく不漁が続いていたが、2024年は9月にまとまった漁獲があり、昨年と比較すると好調な漁況となった。しかし、不漁に入る2018(平成30)年以前と比較すると、春夏来遊群、秋季来遊群ともに低調な漁獲が続いており、今後の資源動向について、引き続き注視する必要がある。

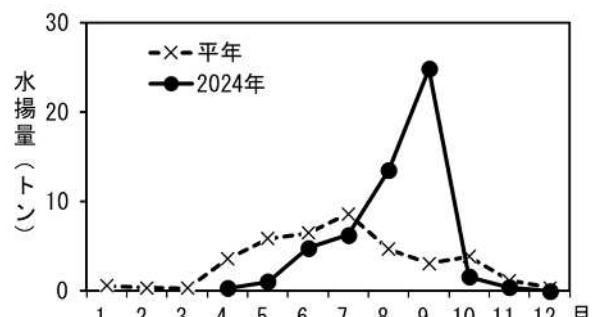


図 12 浜田漁港におけるケンサキイカの月別水揚動向(平年は過去5年(2019年～2023年)の平均)

3. 沖合底びき網漁業（2 そうびき）

現在、本県では浜田漁港を根拠地とする4統が操業を行っている。本報告では、この4統を対象に取りまとめを行った。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を8月16日～翌年5月31日とした（6月1日～8月15日までは禁漁期間）。

（1）全体の漁獲動向（図13）

浜田漁港を根拠地とする沖合底びき網漁業（操業統数4統）の2024（令和6）年漁期（2024年8月16日～2025（令和7）年5月31日）の総漁獲量は2,376トン、総水揚金額は17億6,006万円であった。また、1統当たりの漁獲量（以下、CPUE）は594トン、水揚金額は4億4,002万円で、漁獲量は平年を5%下回ったが、水揚げ金額は平年を27%上回った（過去10年平均：624トン、3億4,691万円）。

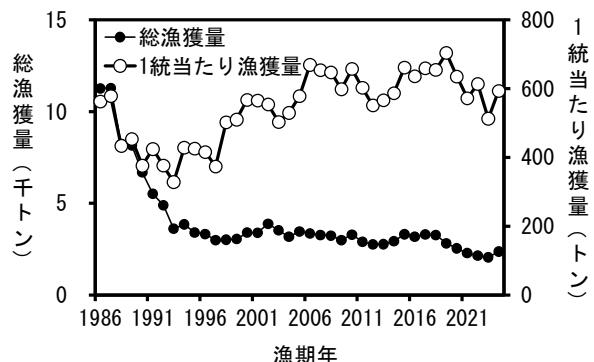


図 13 浜田漁港を根拠地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり漁獲量の経年変化

（2）主要魚種の漁獲動向（図14）

① カレイ類

ムシガレイのCPUEは14トンで平年の3割となり、記録のある1986（昭和61）年漁期以降で最低値であった前年漁期（18トン）をさらに下回る記録的な不漁であった。ソウハチのCPUEは26トンで平年の7割、ヤナギムシガレイのCPUEは10トンで平年の8割の水揚げであった。

② イカ類

ケンサキイカのCPUEは20トンで平年の5割、ヤリイカのCPUEは13トンで平年の1.3倍の水揚げであった。

③ その他の魚類

キダイのCPUEは68トンで平年の9割となり、2年続けて減少が続いた。アナゴ類のCPUEは39トンで平年の8割となり、2年連続の増加傾向から一転して減少となった。アカムツのCPUEは34

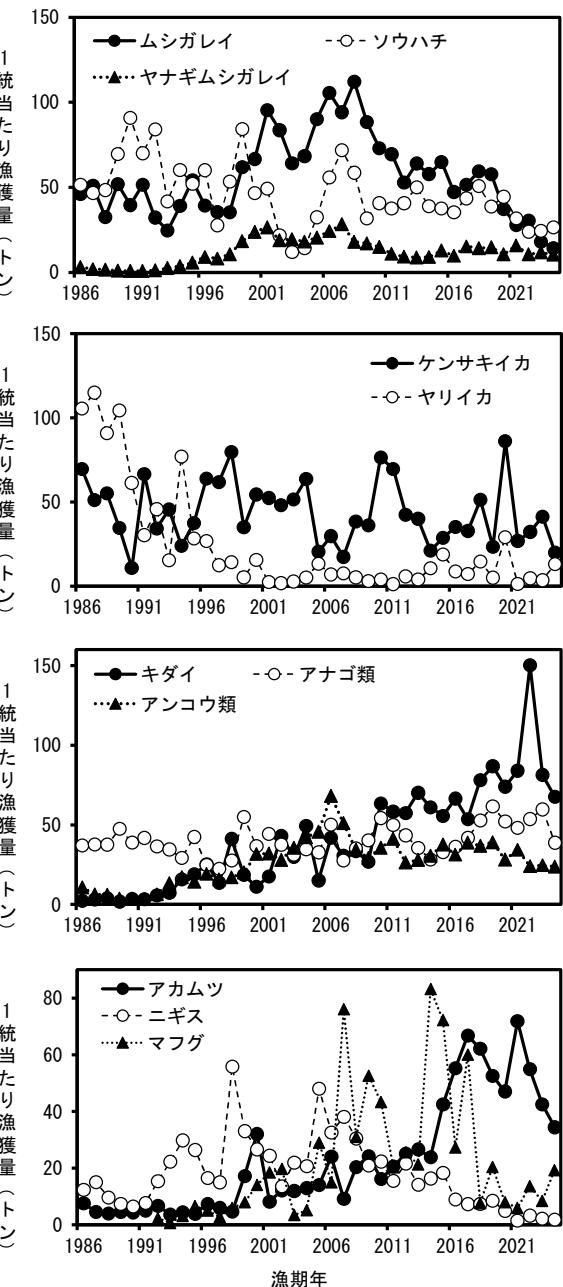


図 14 浜田漁港を根拠地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の1統当たり漁獲量の経年変化

トンで平年の7割となり、2022年漁期以降3年続けて減少が続いた。アンコウ類のCPUEは24トンで平年の7割、ニギスのCPUEは2トンで平年の2割、マフグのCPUEは19トンで平年の6割であった。

この他、マトウダイのCPUEは15トン（平年の7割）、イボダイのCPUEは3トン（平年の4割）、マダイのCPUEは40トン（平年の1.8倍で記録上の最高値であった2023年漁期（40.4トン）と同程度）、カワハギ類のCPUEは135トン（平

年の 6.9 倍で記録の残る 1998 年漁期以降では最高値) であった。

4. 小型機船底びき網漁業第 1 種（かけまわし）

小型機船底びき網漁業第 1 種は山口県との県境から隱岐海峡にかけての水深 100~200 m の海域を漁場とし、現在 34 隻が操業を行っている。ここでは統計上、漁期年を用い、一漁期を 9 月 1 日~翌年 5 月 31 日までとした（6 月 1 日~8 月 31 日までは禁漁期間）。

(1) 全体の漁獲動向（図 15）

2024（令和 6）年漁期（2024 年 9 月 1 日~2025 年 5 月 31 日）の総漁獲量は 2,191 トン、総水揚金額は 13 億 3,138 万円であった。1 隻当たり漁獲量

（以下、CPUE）は 66.2 トン、水揚金額は 4,021 万円で、漁獲量では平年を 25% 下回り、水揚金額では平年を 2% 下回った（過去 10 ヶ年平均：88.2 トン、4,121 万円）。

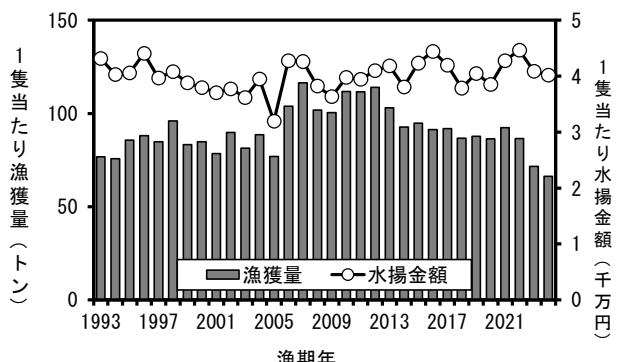


図 15 小型機船底びき網漁業第 1 種における 1 隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向（図 16）

① カレイ類

ソウハチの CPUE は 8.3 トンで、前年の 9 割、平年の 5 割となり、記録のある 1993（平成 5）年漁期以降で 2 番目に低い値であった。ムシガレイの CPUE は 2.0 トンで、前年の 1.0 倍、平年の 8 割となり、記録のある 1993 年漁期以降で最低値であった。メイタガレイの CPUE は 0.1 トンで、前年の 4 割、平年の 3 割であった。この他、アカガレイの CPUE は 2.9 トン（平年の 8 割）で、2019（令和元）年漁期（9.1 トン）をピークに減少傾向が続いている。ヤナギムシガレイの CPUE は 1.6 トン（平年の 1.2 倍）、ヒレグロの CPUE は 1.8 トン（平年の 4 割）であった。

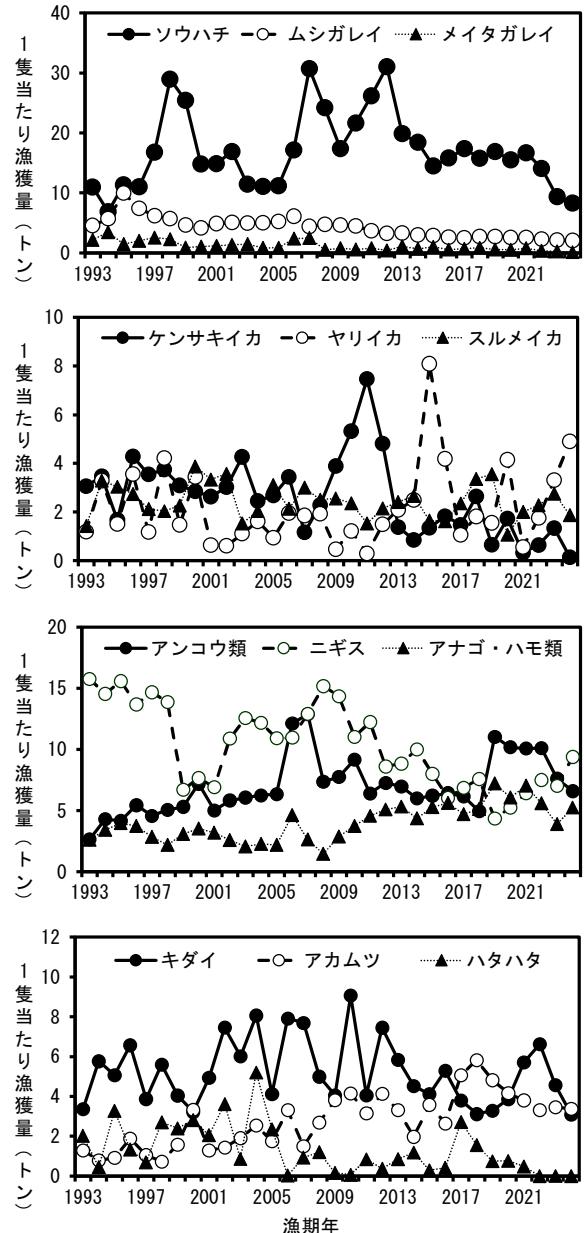


図 16 小型機船底びき網漁業第 1 種における主要魚種の 1 隻当たり漁獲量の経年変化

② イカ類

ケンサキイカの CPUE は 0.1 トンで、前年、平年の 1 割となり、記録のある 1993 年漁期以降で最低値であった。ヤリイカの CPUE は 4.9 トンで、前年の 1.5 倍、平年の 1.7 倍となり、最近 5 年では比較的豊漁であった。スルメイカの CPUE は 1.9 トンで、前年の 7 割、平年の 8 割であった。

③ その他の魚類

アンコウ類の CPUE は 6.6 トン（平年の 9 割）、ニギスの CPUE は 9.4 トン（平年の 1.3 倍）、アナゴ・ハモ類の CPUE は 5.2 トン（平年の 1.4 倍）、キダイの CPUE は 3.1 トン（平年の 7 割）、アカム

ツの CPUE は 3.4 トン（平年の 9 割）であった。ハタハタの CPUE は 0.001 トン（平年の 1 割未満）で、2022（令和 4）年漁期以降、0.1 トンを下回る状況が 3 年続いている。

5. ばいかご漁業

石見海域におけるばいかご漁業は、小型機船底びき網漁業（第 1 種）の休漁中（6 月～8 月）に行われる。漁場は本県沖合の水深 200m 前後であり、2024（令和 6）年は 3 隻が操業した。

解析に用いた資料は、島根県漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者に記帳を依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用等について検討を行った。なお、漁獲量および水揚金額の 9 割程度を占めるエッチュウバイについては、別記のエッチュウバイの資源管理に関する研究を参照のこと。

（1）漁獲動向（図 17）

2024 年漁期の総漁獲量は 82.7 トンで前年比 88%、総水揚金額は 5,992 万円で前年比 93% であった。漁獲量は、1989（平成元）年の 175 トンから増減を繰り返しながら 2018（平成 30）年まで減少傾向であったが、2019（令和元）年以降は増加に転じている。2009（平成 21）年までは 6 隻～7 隻が操業していたが、徐々に減少し、2016（平成 28）年以降は 3 隻のみの操業となったことが、総漁獲量減少の一因と考えられる。

また、水揚金額も漁獲量の減少に伴って低下傾向であったが、2019 年以降、増加に転じている。これは 2003（平成 15）年～2014（平成 26）年は漁獲の大部分を占めるエッチュウバイの価格が 500 円/kg を下回っていたが、2022（令和 4）年は 650 円/kg と持ち直し、2024 年は 710 円/kg となつたためである。

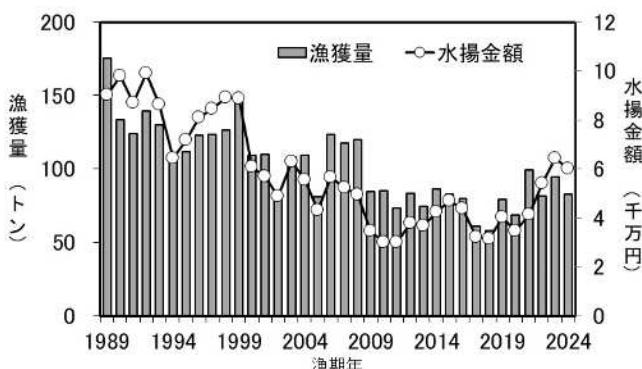


図 17 石見海域におけるばいかご漁業の漁獲量と水揚金額の推移

（2）1 隻当たり漁獲量（図 18）

2024 年漁期の 1 隻当たり漁獲量は 27.6 トンと前年比 88% で、1989 年以降では 2021（令和 3）年、2023 年（令和 5）年に次いで多かった。また、2005

（平成 17）年および 2009（平成 21）年に大きく減少したが、2019 年以降は平均 28 トン程度で推移している。

1 隻当たり水揚金額は、1,997 万円と前年比 93% で、1989 年以降では 2023 年に次いで高かった。1989 年以降、増減を繰り返しながら 2009 年には 576 万円まで低下したが、その後回復して、2014 年以降は 1,000 万円を超えており、2024 年は 2,000 万円を突破している。

漁獲の主体であるエッチュウバイの資源水準が良好と考えられること、前述のとおり単価が上昇していることから、1 隻当たりの漁獲量および水揚金額はそれらを反映して高くなっている。

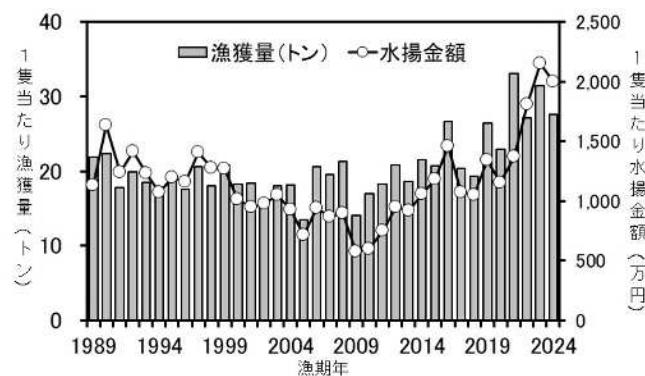


図 18 石見海域におけるばいかご漁業の 1 隻当たりの漁獲量と水揚金額の推移